

村田高明(むらたたかあき)先生のプロフィール

1960年慶應義塾大学医学部、インターン終了後、慶應義塾大学産婦人科入局。
1971年南カリフォルニア大学産婦人科生殖生理部門研究員、
1973年に国立埼玉病院、国立栃木病院医長を経て、1987年に南多摩病院へ。
副院長、院長を経て2001年定年退職。
その後、南多摩病院顧問、慶應病院漢方クリニック勤務。
現在、京王八王子 山川クリニックで漢方外来にて診察を行う。日本東洋医学会名誉会員。

著書に「更年期障害の漢方治療」、「冷え症の漢方治療」、
「産婦人科漢方治療マニュアル」など多数。(現代出版プランニング発刊)

◆先生が初めて漢方と出会われたのはいつ頃ですか

1973年秋、南カリフォルニア大学留学から帰国した頃でした。
不妊症患者の背景に冷え性があり、また不定愁訴症状を抱えている場合が多いことに気づき、ホルモン治療などに併せ自律神経剤や精神安定剤を用いた治療を行っていました。

ある時、漢方薬の効能を表示した新聞公告を見て、そうした冷えや不定愁訴に効果のある漢方薬の存在を知り、応用を試みたのが端緒です。
健保収載2年前のことです。

◆先生の御専門で漢方はどのような効果を発揮していますか

産婦人科が専門ですので、産婦人科領域の疾患の全て、不妊症、
月経異常、月経痛(子宮内膜症を含む)、子宮筋腫、不定愁訴、
更年期障害、妊娠合併症などに漢方治療を行っています。

器質的な病変であっても自覚症状の軽減や改善を認めることが多々あります。

◆普段の治療で漢方薬と西洋薬との割合はどれくらいですか

7~8割かたが漢方治療です。もちろん、患者さんのニーズによっては西洋薬も用いますし、併用も行っています。

◆10年後の漢方医療はどうなっている(またはどうあってほしい)とお考えですか

医療制度のいろいろな変革が行われ、自由診療が大幅に導入され、
漢方薬もその恩恵が受けられるようになると思われます。



◆先生ご自身漢方を飲んで効果を実感なされたことがありますか

我が家は脳血管系疾患の家系であるため、その予防のために40歳を過ぎた時から、釣藤散と八味地黄丸を服薬しています。

昨年春に定年退職した頃から胃潰瘍を患い、ピロリ菌除去療法をしましたが、改善されず、H2ブロッカーなどの西洋薬は無効。漢方薬も試行錯誤の結果、六君子湯で小康を得ています。

現在32歳の娘が10歳の時、不明熱で都立小児病院に2週間程度入院加療したが、解熱せず、原因不明で自宅療養するようといわれ強制退院。数日後の夜、当時、国立栃木病院に単身赴任中でしたので、妻は看病疲れ、娘は38～39℃が持続、このままでは親子ともども倒れてしまうとの連絡で急遽、小柴胡湯を持って帰宅。

夜10時頃1包を服薬、翌朝5時には37℃台になり、気分が良くなってきたとのことで、もう1包を追加し宇都宮に向かう。午前10時には平熱になり、その後は発熱がなくなりました。それからは家族全員が漢方おたくになっています。

◆これから漢方医を志す方に一言お願いします

まずは漢方薬を投与してみることです。その予後の良否を確認して、診断あるいは投薬の適否を必ず確かめ、反省することです。先人は漢方治療で治していたのですから、文献や口訣などを通して「学ぶところ」を養ってください。

◆漢方に関心のある一般の方に一言お願いします

治療を受ける前に、ご自身の生活、日頃の健康状態、発病の原因や背景などを把握して来院してください。それらを知ることによって、季節の変化に対応できる体力作りの予防や養生に心がけることができるはずですが、漢方も治療の一方法ですが、治療はあくまでも治癒の過程での補助的な手段に過ぎないのです。漢方治療は全身的な視点から体質や病状を診て、より適確な、そしてより安全な漢方薬を決めますので、オーダーメイドの治療ができる特徴があります。

◆座右の銘、お好きな言葉などありましたら教えてください

論語の一節ですが、

「博く学びて篤く志し、切に問いて近くに思う。」
「学びて思わざればぐらし、思いて学ばざれば殆（あや）うし。」
「学べば固ならず。」



注意:先生へのインタビューは、当会が2002年1月に行った内容です。